第２ 地域資源

※ラブはちのへ
社団法人八戸青年会議所が昭和50年代に提唱した、まちに住む人が自分のまちの為に行動しようとする意識を育て、よりよいまちを創っていこうとする運動。
※協働
市民・事業者・行政などの多様な主体が、それぞれの役割を認め合いながら、対等の立場で協力し合うこと。
※地域コミュニティ計画
地域の将来像や地域の課題を解決するための方策などを地域住民自身がまとめた独自の計画。

太古の昔から、わたしたちの先人たちは、この地において時代時代に営みを繰り広げ、地域特有の文化や産業をはぐくんできました。厳しくも豊かな自然との共存のなかではぐくんできた有形・無形の地域資源は、成長期から成熟期に入った当市のまちづくりにおいて大切な資源であり、まちづくりの原点ともいえます。

１．まちづくりを支える市民力

まちづくりは、これまでも、そしてこれからも、市民が主人公です。昭和50年代に社団法人八戸青年会議所が展開した「ラブはちのへ※」運動は、企業人による社会貢献活動であり、これに象徴されるように、早くから市民主体のまちづくりが展開されてきました。

近年は、福祉、教育、国際交流、まちのにぎわいづくりなど、幅広い分野においてＮＰＯが主体となった活動が盛んになり、市民主体のまちづくりが活発になってきています。

地域住民による小学生の横断補助

平成17年（2005年）４月１日には、市民の手作りによる八戸市協働※のまちづくり基本条例が施行され、また、地域コミュニティ振興指針および市民活動促進指針が策定されています。今後は、地域コミュニティ計画※の策定や、政策・事業提案制度など、市民、事業者および行政による協働のまちづくりの実践が期待されています。

また、普段農業に携わらない都会の人々が農作業を手伝う援農や、車イス移送サービスなど、市民が主体となって、地域が抱える課題をビジネスの手法により解決するコミュニティビジネスも活発化しています。

このように、活発な市民活動や地域コミュニティ活動を生み出す力はまさに「市民力」であり、今後のまちづくりの大きな原動力になります。

２．めぐまれた自然環境

当市は、青森県南東部に位置し、夏は過ごしやすく、冬は北東北にありながら降雪量が少なく、日照時間が多いのが特徴です。

太平洋に臨む名勝種差海岸は、県立自然公園にも指定され、海岸一帯は海浜植物の宝庫であり、希少種が自生しています。初夏にはニッコウキスゲ、ハマナス、ノハナショウブなどが咲き乱れ、八戸を代表する行楽地となっています。

この種差海岸の北端に位置するウミネコ繁殖地蕪島は

世増ダム（青葉湖）

※北奥羽地域
地理的・歴史的な結びつきが強い岩手県北、秋田県北東、青森県南にわたる地域。

天然記念物に指定され、毎年３月には約３万５千羽のウミネコが飛来し、７月下旬頃までウミネコの鳴き声に包まれ、全国から多くの観光客が訪れます。

市街を三分するように流れる馬淵川や新井田川には、魚類やカニなどの水生動物が豊富に生息するほか、ハクチョウやカモなどの渡り鳥が越冬するなど、四季を通じて数多くの生き物が見られます。また、市街地を取り囲む丘陵地は身近な里山であり、これら多くの自然環境は、わたしたちの生活にうるおいや安らぎを与える大切な資源です。

市南部に位置する世増ダムの青葉湖は、新緑や紅葉など、季節ごとに美しい景色を楽しめるほか、周辺には、「八戸市民の森」として親しまれる不習岳があり、貴重な自然資源となっています。

３．先人から引き継ぐ歴史・文化

当市には、日本の縄文時代を代表する是川遺跡があります。また、近くの風張遺跡から出土した「合掌する土偶」は、祈りをささげている様子を表したと考えられています。こうした歴史・文化的な遺産は、研究者からも高く評価されています。

中世には、甲斐の国（現在の山梨県）の南部師行が根城に城を構え、その後、根城を拠点に南部氏は、津軽地方、秋田県北東部、岩手県北地方までを統治していました。

近世には、商業や八戸湊の交易によって、八戸藩は２万石の城下町として栄え、現在の八戸の礎を築きました。八戸の「顔」である中心市街地は、この当時に整備されたものです。

県南地方最大の祭事で、日本一の山車まつりといわれる八戸三社大祭や、豊年祈願の代表的な郷土芸能である八戸えんぶりは、ともに国の重要無形民俗文化財に指定されています。近年は、八戸市民フィルハーモニー交響楽団の演奏会や南郷区のサマージャズフェスティバルなど、新しい芸術・文化活動も活発化しています。

また、当地からは、男女平等や環境問題などを説いた江戸時代中期の先駆的な思想家の安藤昌益や、作家の北村小松、日本初の婦人記者の羽仁もと子、芥川賞作家の三浦哲郎など、多くの文化人を輩出しています。

合掌する土偶

４．広域交流の拠点機能

当市は、人口約70万を擁する北奥羽地域※の経済・社会・文化の中心として栄えてきた歴史を背景に、商業・業務、娯楽・飲食、教育・文化・スポーツなどの多様な都市サービスが集積し、八戸都市圏の人々に都市の魅力とにぎわいを提供する広域的な人・モノ・資本・情報の交流の場となっています。

また、当市は、陸・海・空の交通の結節点として北奥羽地域と全国各都市を結ぶ交通の要衝となっています。東北縦貫自動車道八戸線は、当市と首都圏を直結しており、現在、八戸・青森間の整備が進められているほか、八戸・久慈自動車道は、当市と三陸沿岸地域との交流を支える重要な路線として整備が進められています。

東北新幹線は、八戸・東京間を３時間弱で結んでいるほか、現在、八戸・新青森間の整備も進められており、

※新産業都市
「新産業都市建設促進法」にもとづき指定された地域で、人口と産業の過度な集中を防止するため、大都市から地方へ工業を分散させることを目的とする国の制度。平成13年（2001年）3月にこの制度を廃止する法律が成立し、5年間の激変緩和措置を経て、平成18年（2006年）をもって廃止。

※あおもりエコタウンプラン
地域のリサイクル資源の循環による自然還元システムの構築を通じて、環境リサイクル産業の振興と自然環境の保全・自然再生を目指す計画。

広域的な交流・連携にさらに弾みがつくことが期待されます。

市内中心部から車で約30分のところに三沢（八戸）空港があり、東京、札幌および大阪と直結しています。また、八戸港には、本州と北海道を結ぶフェリーが就航しており、人とモノの交流を支えています。

八戸港には、東南アジア航路をはじめ、中国・韓国航路、北米航路といった国際コンテナ定期航路や、横浜港および東京港との内航フィーダー航路が開設されています。

人口減少社会が到来するなかで、観光や国際交流といった交流人口の拡大は、これからの地域発展の重要なテーマです。また、人・モノ・資本・情報の交流は、都市活動を活発にする上で重要な要素となります。

そうした交流により当市の拠点性が高まり、そのことにより、交流人口の拡大や都市活動の活発化に結びつくといった好循環が期待されます。当市が持つ多様な都市集積と広域交通のネットワークは、交流を核とした飛躍を図る上で有効な資源となります。

5．北東北の経済をけん引する産業集積

当市は、過去6度も水揚げ量日本一を記録するなど、全国屈指の水産都市であり、水産加工業の集積も形成されています。また、農業については、地域特性を生かした多様な品目が生産されており、なかでも、南郷区のソバやブルーベリー、市川地区のイチゴなどは地域の特産品として定着しています。

食に対する消費者の環境保全や安全志向の高まりは、近年ますます強まる傾向にあるほか、地域固有の食文化は観光の振興ともつながっていきます。当市の水産業や農業の強みを生かすとともに、他産業との連携を強化することにより、食をテーマとした新たな産業振興が期待されます。

また、昭和39年の新産業都市※の指定以来、紙・パルプ、非鉄金属、鉄鋼等の臨海型・基礎素材型の工業集積が進んだ結果、北東北随一の工業都市として発展してきました。近年では、基礎素材型産業が持つ技術と臨海部という立地特性や当市の港湾機能を生かして、あおもりエコタウンプラン※の承認や環境・エネルギー産業創造特区の指定などを受けるなか、リサイクル関連産業の集積が進展しており、地域特性と新しい技術が融合し、新たな産業が動き出しています。

さらに、内陸部では、八戸ハイテクパークに産業支援施設である八戸インテリジェントプラザや青森県工業総合研究センター八戸地域技術研究所が立地しているほか、八戸北インター工業団地をあわせた八戸グリーンハイテクランドを中心に、ソフトウェア業や電子部品、精密機械部品などの企業集積が進んでおり、高度技術産業の生産拠点を形成しています。また、大学等の学術研究機関としては、八戸工業大学、八戸大学および八戸工業高等専門学校があり、研究開発の拠点として地域産業の高度化に寄与しています。

こうした付加価値の高い高度技術産業は、国際競争力の強い産業であり、産学官の連携により、地域に根付いたより強固な産業集積の進展が期待されます。

八太郎2号ふ頭（多目的国際物流ターミナル）